

1716年～ 1735年 (享保年間)	寺泊(現・長岡市)の豪商、本間屋数右衛門が大河津分水の建設を江戸幕府に請願。起工には至らず。
1842年	幕府が測量調査を実施。莫大な費用および周辺集落の反対により起工には至らず。この間にもたびたび大洪水が発生。
1869年	政府は大河津分水の開削を発表。ようやく工事を行うことが決定。
1870年	大河津分水工事(第1期)起工式が行われ、工事が開始。
1875年	政府は外国人技術者の意見をもとに <b>工事を中止</b> 。100人以上の人々が大河津分水の必要性を訴えるも、再開には至らず。
1882年	長善館の門人・警尾政直、萩野左門、小柳柳三郎らが幹部となり信濃川治水会社を設立。分水工事再開のための運動を広める。
1896年 7月22日	「横田切れ」が発生。越後平野のほぼ全域が約1カ月にわたって浸水。人々は食料や住居を失い、伝染病が広がる。
1897年	長善館・門人の高橋竹之介が『北越治水策』を考案。山縣有朋らに建白。
1907年	帝国議会で大河津分水工事(第2期)を含む信濃川改良工事が決定。
1909年	大河津分水工事(第2期)が開始。工事は13年にわたる。
1910年	山宮半四郎(名誉市民)が桜の植樹と記念公園の設置を提案。その年の秋から堤防沿いに植樹を始める。
1922年 8月25日	大河津分水の通水を開始。
1927年	6月に自在堰が陥没。同年12月から信濃川補修工事が始まる。青山士、宮本武之輔の指揮のもと、陥没した自在堰に代わる可動堰と、川底の洗掘を防ぐ床留・床固を建設。
1931年	信濃川補修工事が完了。
1978年	信濃川大河津資料館が開館。
1992年	本流側の堰である洗堰の改築工事に着手。
2000年 5月29日	新しい洗堰に通水。使用されなくなった旧洗堰は近代化産業遺産、国の登録有形文化財に登録。
2002年	洗堰改築工事完成。
2003年	可動堰の改築事業に着手。
2011年	新しい可動堰に通水。
2014年	可動堰改築工事完成。
2015年～	大河津分水路改修事業が起工。「令和の大改修」は現在も続く。

## これからの道のり

**令和14年まで続く  
総事業費1200億円の「令和の大改修」**

信濃川補修工事完成後も大河津分水の河床の補強、洗堰・可動堰の老朽化に伴う改築などが実施されてきました。しかしながら、洪水処理能力の不足、川底を守る要の施設である第二床固の老朽化、さらには河床低下による右岸部(国上山側)の地すべりの危険性などの課題を抱えており、2015年(平成27年)から河口左岸の山地部や河川敷の掘削、第二床固の改築、野積橋の架替などの改修工事に着手しています。

令和14年(令和14年)まで、全体事業費は約1200億円というまさに令和の大改修です。この大改修により、河口付近の川幅が現在の180mから280mに拡張され、洪水時の大河津分水の水位を大幅に下げることができ、さらには、堤防決壊による洪水の危険性が少なくなります。さらに一昨年の台風19号で甚大な被害が発生した上流の長野県区域や信濃川中流域でも河川改修を進めることができるため、信濃川流域全体の洪水に対する安全性が高まります。



▲山地部掘削土を活用したほ場整備(分水地区)



▲渡部橋周辺の河川敷掘削



▲「令和の大改修」大河津分水の河口周辺の工事状況

## これまでの歩み

延べ1千万人が従事した東洋一の工事

長年、水害と闘ってきた多くの人々の分水路建設の熱意が高まっていく中、1907年、帝国議会で信濃川改良工事が決定され、その2年後、政府の直轄工事として再開しました。

分水路の建設には、信濃川から日本海までの約10kmを掘削する必要があります。加えて、その途中にある丘陵地の山を切り開かなければなりません。

そこで日本で初めて世界最新鋭の大型機械を導入。10トンダンパーが地球1周するほどの土量(約2880万m<sup>3</sup>)を掘削しました。

このほか、洗堰や国内初となる自在堰の建設など、地元の人々を含めて延べ1千万人が建設に従事したことから、当時の新聞でも「東洋一の工事」と評されています。

工事は三度の地すべり乗り越えながら15年にわたって行われ、1922年(大正11年)8月25日、ついに大河津分水が通水しました。

通水後も続いたさらなる困難を乗り越えて

通水した大河津分水でしたが、自在堰が1927年(昭和2年)に突如陥没。原因は水の流れにより川底が削られたことによるものでした。

この窮地を救ったのは、パナマ運河の建設に唯一日本人として携わった青山士と、荒川など国内の河川改修を手掛けた宮本武之輔。二人の技術者は「信濃川補修工事」として陥没した自在堰に代わる可動堰と川底の洗掘を防ぐ床留・床固の建設を指揮し、「吊い合戦」と称して、わずか5年後の1931年(昭和6年)には全ての工事を終えました。幕府に初めて請願してから200年経過してこの



あおやまあきら  
**青山士**  
1878～1963  
静岡県出身

土木技術者。パナマ運河や荒川放水路などの建設に携わる。内務省出張所の所長として赴任し、信濃川補修工事の指揮にあたる。



みやもとたけのすけ  
**宮本武之輔**  
1892～1941  
愛媛県出身

土木技術者。上司の青山士所長の下、信濃川補修事務所主任として自在堰に代わる可動堰などの施設の設計、施工を陣頭指揮する。

とでした。

以来、大河津分水は信濃川の氾濫を防ぎ、旧西蒲原郡では耕地の改良も進んだことで、水稲の収穫量は10アールあたり500～600kg、通水前に比べ約2～3倍にまで増加するなど、湿地帯だった越後平野は日本有数の穀倉地帯に発展しました。

また信濃川下流域では約800mもあった信濃川の川幅が約300mにまで縮小。以前は川だった場所が農地や宅地として利用できるようになり、新たな開発も進みました。さらに低平地の排水性が向上した越後平野の中央部には高速道路や新幹線などの交通網が整備され、首都圏との結びつきが深まるなど、大河津分水は燕市をはじめとする周辺地域の発展を支えてきたのです。



▲通水して以来、越後平野を信濃川の洪水から守っている大河津分水。



▲斜面を切り崩し、土砂をトロッコに積み込んだ「エキスカベーター」。



▲イギリス製の岩盤掘削機「スチームナビー」。